

# サステナブルな文化資源 としての記憶？ トルコにおける地震の記憶から

Memory as a Sustainable Resource? :  
Disaster Memory of Kocaeli Earthquake, Turkey

木村周平

KIMURA Shuhei

- ①はじめに
- ②記念碑——忘れない？
- ③地震文化博物館——理解させ、想起させる
- ④記念式典
- ⑤資源の零度？
- ⑥おわりに

## 【論文要旨】

自然災害はあらゆる社会にとって対処を迫られる重要な問題である。防災においては近年、国家・行政によるいわゆる「公助」には限界があり、住民のレベルでの防災・減災が必要であることが主張されている。過去の災害の経験をモノ化し、社会の内部に適切に配置し、過去の記憶を共有し、次の災害に備えるために人々が「利用」できるようにすることは、景観を「資源」として活用する、ひとつのあり方だと考えることができる。

以上を背景に、本論文は、1999年にトルコ共和国北西部を襲った大地震をめぐる記憶について、「文化資源」というメタファーを援用しながら、「文化資源」としての災害の記憶がどのように「利用」されているかに注目し、その「持続可能性」について考察する。具体的に検討するのは、記念碑、地震博物館、そして記念式典である。事例検討をつうじ、あるものを「資源」として利用するためには、それを「資源化」する主体と、「利用」する主体の二つ、および「資源」の目的（何のための資源か）の明確化が必要になるということが指摘される。さらに災害の記憶に関しては、「利用する主体」と、「資源」の「利用」によって生み出されるものが一致する、ということが主張される。つまりそこでは、「資源」は「資源」であると同時に、ひとつのサイクルを開始させる契機としても存在するのである。そして最後に、「資源」としての災害の記憶の「持続的利用」における問題として、「利用する主体」の曖昧さという問題点を指摘する。

【キーワード】文化資源、持続的利用、災害の記憶、トルコ、コジャエリ地震